

記録することの可能性：震災と建築史 (4)

2011年11月10日 (木) 13:00~16:30

東京大学生産技術研究所 食堂棟2階R-5

第4回 大久保愉伊さん (大槌出身の映画監督) 13:00~14:30

「記録すること、記憶すること～『槌音』を通して～大槌を撮る」

麦倉哲先生 (岩手大学教育学部教授) 15:00~16:30

「大槌を記録する」

(ゲスト) ステファンさん (文化人類学者)

大久保愉伊さん

「記録すること、記憶すること～『槌音』を通して～大槌を撮る」

○ 自己紹介

『槌音』(23分の作品)

成城大学の芸術学科/映像学科出身。映画研究部で実践をつんだ。

自主映画を作っている。

普段はフィクションをメインでとっているが、今回の『槌音』は初のドキュメンタリー。

『槌音』を撮った経緯…実家にあった大槌町の映像はすべて津波に流されたが、東京に持ち出していた分は残った。

カメラを持っていこうと思ったが、家族への支援物資を優先し、カメラを持ち運ぶことをあきらめた。被災地を目の当たりにして、記録しなくてはと思い立ち、急遽スマートフォンのカメラで五日間撮りためた。

この作品は今回の震災という現実を受け入れるために、自分自身のためにつくったもの。

『大津波の後に』(森元監督)と一緒にアップリンクにて上映。

今日は講義者からの質問を受けて、考えを深めたい。

今回は『槌音』と『槌音』に入れなかった別の作品を持ってきた。



大久保愉伊さん

○ 作品上映

『槌音』

冒頭

浪板海岸からの映像から始まる。

旧国道を走る。(2002、3年 中学生の時の映像)

大槌祭り。

311 以後の大槌の風景。(撮影日3月25日) 途中で撮り貯めてあった過去の風景を挿入。自分の住宅があった周辺を中心に撮影。震災前後を同じ場所で比較していく。音だけ残し、以後の風景に移っていく…

○ 解説とコメント

『槌音』を作り、僕の家族以外が見ることが無かっただろう震災前のホームビデオ映像が幸か不幸か家族以外が見ることになった。

震災後の映像は3月25日から撮影したが、スマートフォンだったから撮れたのかもしれない。ビデオカメラだったら撮れていたかどうか…。

カメラが武器になると思い、家族にスマートフォンでさえ、向けてインタビューを撮ることが出来なかった。

編集の際、音に着目した。音が聞こえるということが映像のひとつの利点。

3月の大槌の音は打ち付ける波風とカモメの声だけ。フラッシュバックする場所は同じ場所で撮っている。

再び言うが僕自身のために作ったものである。編集してひとつの作品にしていく作業こそが、現実を受け入れるために必要な行為だった。これが私がいまでも大槌を記録することの理由の一つ。

上映されると決まり、お客さんに『槌音』を見ていただくということになり、『槌音』は私の単なる震災を見つめるという行為だけではなく、観客が大槌町という町を知り、大槌町を忘れないようにするための映像という意味合いも出てきた。

記録を見ることによって記憶していくことの重要性。

4月に作った作品だが、現在でも撮り続けている。例えば、町並みの変化、親友のコメント、震災で亡くなった祖父のお盆の風景など。

今はもちろん自分自身の為には撮っているが、とりわけ観客に見せることを意識して撮っている。今自分は東京に住んでいるが、記録を撮り続けることが自分の使命だと思っている。

○ 『槌音』にのせなかった別の作品の上映

冬場の雪に埋もれた大槌の風景。ビデオカメラに興味があって撮りためてきたものの蓄積。

1989年の映像は父親が撮ったもの。(ゆいさん当時三歳)

『槌音』は8mmビデオカメラ、mini DV、VHS用のカメラ、スマートフォンカメラ、HDカメラの異なる5種類の媒体で撮ったものを合わせたもの。

3月以降に何を撮っていたのか。15分くらいの短い祖父の葬式。祖父が身につけていた時計。見つかった家族の写真アルバムなど。

○質疑応答

・ステファンさん：自分で体験しないと何も言えない。神戸の地震の時の、神戸で被災した方の悩みを聞いて、人間関係の気持ちや思い入れの描写が強かったという印象。

→震災後のヘリテージとは何なのか？(村松)

・麦倉教授：音というもの。ぼくらはどうしても文章に頼ってしまうのだが、音の着目点が新しかった。あとで具体的な質問をしたい。

・近藤：『槌音』のタイトルにひかれた。

・岡村：記録の意味が分からなくて苦戦しているが、今は将来誰も眼を向けなかったことに眼を向けて記憶を撮っていきたいと考えている。記憶の意味の変化に付いてどのように変化していったか。

→観客に見せていくことによって意味が少しずつ変化した。大槌町に生まれた人間として、僕がやらなきゃならないことだと思っている。

岡村：町民にみせた感想はいただいたんですか？

→実は家族以外には見せていない。大槌にいる方は震災も経験され、その後の大槌の変化を見てきた。だから『槌音』を見せることは抵抗がある。

・岸：大槌のすばらしさはどういったところにあるか。

→震災が起こるまでは、ふるさとをそこまで意識していなかった。見たい映画も見れなかった。しかし震災後、町との心の距離が近くなった。

岸：3月に撮ったときはどこを撮ろうかと決めていったのか。

→自分の家、親戚の家、祖父の家は震災後何か残っていないか足を運んでいたのも、自分はお祭り馬鹿で祭りで歩いた愛着のある場所や登下校した道などを撮っていた気がします。

・井上：一度この授業をやめかけたが、この前ひとりで被災地に行って考えが変わった。外部の人によってどこまで、記録していいのかという線引きをひいているのか？どこまで記録することで被災地被災者に歩み寄っていいのか。

→来年は震災をテーマにした映画が増えてくると思います。山形映画祭ではすでに20数本あった。森達也監督はじめ4人の監督が共同監督した『3 1 1』もその一つ。ご遺体を撮影し、地元の方と口論となるシーンが映画祭でも話題になった。色々な震災の映画を見て、参考にしていただいてもいいのではないだろうか。

・島：私的なものと普遍的なものをつながり、映画を見て体験した。

・葛西：以前撮り貯めていたものはいつか違う形で使おうと思っていたか。

→まったく思いもしなかった。撮りためた風景の映像は記録というよりもカメラ撮影の練習的意味合いが強かった。また家族のホームビデオだった。

葛西：これからはドキュメンタリーを撮り続けるのか。どんな作品を撮っていききたいか。

→大槌の映像は撮り続ける。これは映画監督というより大槌町の出身者として撮り続けなければと思う。作家としてはドキュメンタリーよりフィクションを撮っていききたい。

・田口：目的も無く、意識的でもなく撮っていた映像を再び編集するといった時にはどんなことを思ったのか。

→お祭りは一年スパンで帰っていた。震災前の映像をすべて見返して、震災と向き合わなければと。

田口：忘れないことは、記憶することよりも難しい。普遍化された家族像は見ていて、それだけではない忘却しないためのヒントを皆が考えている中で、映像の可能性を見た。

映像を客観的にとることはなれているとは思いますが、被災者の心情を考慮してというのではなく、記録を拒否したということがあるか。

→三月には撮れないし撮りたくないなといったものがあつた（インタビューなど）。だけど、5月ならとれた。

村松：死体をなぜとれるのか。森達也さんやCNNが撮れるのは、死に対する考えや宗教観の違いが映像にあらわれるのでは。ところで猫は生きていますか？

→生きています。よく上映後に聞かれる質問の一つ。実は猫をケージに入れているときは町中渋滞だった。やっとケージにいれたときにたまたま、渋滞が引いて高台に逃げる事が出来た。だから家族は“猫に助けられた”と思っている。

麦倉哲先生（岩手大学教育学部教授）

「大槌を記録する」

○ 自己紹介

群馬県出身。高校からずっと東京で過ごしているのでいわゆる東京人。

自身の研究室でも一ヶ月に一度大槌で合宿している。

現状では民宿などは工事関係者が優先で予約という流れになっているが、12月の合宿も、今の所断られてないので、村松研と一緒に発表したい。

ホームレス研究。バリアフリー研究。犯罪がらみの研究（歌舞伎町）。

場所／空間／現場／フィールドに出て、何があったかを当事者に何うという姿勢。ジャーナリズムにも通ずる部分もある。

ホームレス研究では分布マップを作ったり、バリアフリー研究ではどこで誰がなくなったかなどに着目して調査した。歌舞伎町研究ではどこのビルでぼったくりに遭ったかというようなミクロな視点で研究をしてきた。

今回は社会問題告発というより、いろんな方と交流しながら、生きることと死ぬことを考えている。



麦倉哲先生

○地震・津波で亡くなった人の記録と記憶<調査>

-亡くなった人から受け継ぐこと、-生死の境を経験した人が受け止めたこと（レジュメあり）

自分はどこまで当事者なのかということも考え続けている。

あくまで外部として入って、何度も足を運ぶたびに意識は少しずつ変化していくと思う。それに伴って考えていく。

地域社会の持続性、動植物・自然環境との共生という視点で、住民、地域団体、生物調査を5段階で実施している。

東京と大槌の違いは調査で拒否されることが無いということ。（沖縄も拒否されたことがないという。）

外の経験を持った人がやってきて、新たな動きが起こっている。

助け合いの精神（自助）がいろんな形で起こっていたという事実。

調査もひとつのコミュニケーション。

大槌で行ったアンケート票

問 31 は少し他の調査項目とは異なった質問。自分自身で復興に際して何をしたいか。

問 21 も同様。人のために何をしたか。

問 11 は先ほどの大久保監督への質問にも関係する。しかし、社会学ではインフォームド・コンセントが常識になっているため、少し事情が異なるかもしれない。

生きることと死ぬことを考える。生は死と隣り合わせ。人を助けようとしてなくなったケースも少なくない。生きてよかったというより、生かされていると認識している方が多い。

死者も含めて、社会は構成されている。

見かけ上は生きている人が投票権を持ち、社会を構成しているように見える。しかし、人の生存期間を超えて連続したものとして考えるならば、生死の境はそれほど大きなものではないかもしれない。

質問：岩手県盛岡市の被災死者はひとりのみ。さて、どこでだれか。

答え：イオンにて子供が積まれた荷物の下敷きになってなくなった。

本当は死亡事件などは人がひとり亡くなくても事件として報道される。この件で考えたのは大規模店舗ほど危ないかもしれない。死という現実が報道されなかったことで考えないようにしていると言える例。

亡くなった人の記憶と記録から学ぶということ

一元的なつくりかたではなく多元的な考えを引き出せるような表現の仕方を考えていく。

何をしようとしているのか。

→今回の震災をもって、沈静化するのではなく人々に感知させることを覚醒させていく。

○いくつかの事例、いくつかの死。

消防団員の死：亡くなったのは非常勤公務員の消防団員の方が多い。引き波で流される方を救助しようとして、ホースをガードレールに結びつけたが、尋常ではない波の強さにより、ガードレールが引きはがされ、消防団員もろとも波に飲まれた。

息子の死をもっといろんな方に知ってほしいという親の意見。

新聞でも話題にもなった、半鐘をならし続けた方の話。そして半鐘を聞いていた人の話。

逃げられなかったのではなく、逃げなかった人たちもいる。逃げなかった人たちは何を考えたのかという視点も必要。

久慈市のケース。親の安否を心配して老親の家に向かった娘が、沿岸で波にのまれた。海からはなれた五丈の滝の前の家も被災。なぜそんなことになったかというと、川にそって津波が押し

寄せて、局所的に津波が遡上してしまった。

○質疑応答

・田口：ご遺族から亡くなった方の話をどうやって聞き出しているのか。

→インフォームド・コンセントでまず目的を話して同意してもらって聞いている。亡くなった方から影響を受けて、生かされているという考えに呼応してくださる方は話をしてくださるが、呼応してくれない方には「失礼しました」といってそれ以上は聞かない。お願いする人との関係が悪くなるような終わりがたにならないようにしている。

田口：非常に個人的な話の事例ではあるが、地域の政策など、広げていく上でアドバイスがあれば。

→私どもからすれば村松研から刺激を受けることが多い。相互作用でやっていけたらと思っている。

・葛西：話を聞いていると、一瞬に起こったことを多眼的にマクロに見ていく手法は時間が経ってもリアリティを残していて、どこか聞いていて滅入ってしまった。そういう気持ちは忘れないためには必要で、そういったリアリティを残しながら、最終的な表現としてはどんな手法を考えているか。

→一つは地図に落とすことを考えている。しかし、まだ具体的には決まっていない。

・村松：死者から学ぶという運動。その運動をどのようにひろげていくのか。

→文章を中心になっているのが現状。

→村松：地図について。警察は遺体地図を持っていると思う。(出してくれるかわからないが)

・大久保：亡くなると死者との気持ちが密接になる。幾度となく津波が押し寄せる場所で、やはり年月がたつと忘れてしまう。

→吉里吉里は高台の街で、住むこと自体がある程度は防災意識はあったと思われる。しかし、今回は過去の経験を超えていた。そこに対する検証も大切なのでは。

→村松：昭和の震災のときも多くの人が本を書いているが、誰も読まない。記録はのこせど、誰も見ないという問題。

・岡村：ぜひ、教育学部ということもあって、子供との参加型の教育（復興史とふるさと学）について、連携ととれたらと思っています。

→次の調査で同行するのは学生15人ほど。明治学院は吉里吉里の研究をしていて、そことも連携していきたいと考えている。災害を通して、いろんな分野と連携していけたらと思う。

・島：情報の断片を集め、ひとつの核をもとに構築してひとつの世界観を提示する手法に共感した。今後参考にしていきたい。

・ステファンさん：被災者親族の話の中で霊（ゴースト）についての話がありましたか。
→亡くなった奥さんとの仮想の会話をしたといった話などは聞いたことがある。人によってそういうことを話すかたもいるということは一つの興味深い事例である。例えば、海を見るところを一つとっても、何百の方が（行方不明で）眠っている神聖な海と見えるかもしれないという視点があるということが興味深い。調査にはコミュニケーションが介在して、その場で共有する情報が生まれ、コラボレーションやシナジーが生まれる。

・村松：大久保さんの映像はある意味ふにやふにやしている。家族が出てきたり、大文字の記録ではなく、小文字の記録と言えるだろう。しかし、そこには見ている人に共感や一般化を促す要素だとも言える。麦倉さんの話を聞いていてどこか寂聴さんの説法を聞いているようであった。それは麦倉さんの話し方に起因することかもしれない。しかし、そういった要素は大切で、それがなければもしかしたら、半鐘を鳴らし続けた人の話は美德ある道德としてのみ伝わるかもしれない。しかし道德だけではなく、死者から何を学べるかということを考えるには表現の問題が関わってくるということを考えなくてはならない。

・匂坂：大文字での記録には限界があって、個人的にはもうしたくない。小文字の記録に可能性を感じて、このプロジェクトにも参加している。

天童荒太の『悼む人』に似ている気がした。人の死をコレクションしてそこから学ぶ姿勢に興味がある。ぜひ、逃げなかった人のコレクションも見てみたい。

→表現を考えることも大切かもしれないが、なるべく事実を伝えていきたい。ただ、事実だけではなくて、自分なりの解説を取り入れたもの出来ればなと思っている。

文責：葛西慎平（太田研修士一年）